

特別支援教育を必要とする生徒たち

一学校生活の中で自己肯定感を育む一

堺市立鳳中学校 久保田 智子

1. はじめに

学校生活の中で学習が困難であったり、人間関係に悩んでいたり、いくら努力しても結果が出なくて学校生活に失望してなげやりになってしまう子どもたちを多く見てきました。子どもたちは「どうせやっても無駄やねん。」「学校なんか嫌い。」と言います。しかし、さらに話をしているとやはり学校に来たい、皆と仲良くしたい、勉強ができるようになりたい、と自分の気持ちを打ち明けてくれます。

そのような子どもたちの自己肯定感を育み、学校生活に対して少しでも前向きになれるようにという願いで取り組む鳳中学校の特別支援教育を報告します。

2. 目的

子どもたちの自己肯定感を育み、学校のなかでの居場所を確保する。

3. 方法

(1) 教職員にむけて特別支援教育研修を行う。

教職員対象に下記の内容で研修を行い、実践に役立ててもらおう。

「普段から授業に集中できていない生徒、退屈そうな生徒、教室から出てしまう生徒、パニックをおこしたり周囲と円滑な人間関係を構築することが困難な生徒など、様々な生徒がいます。H15. 3. には支援学級在籍生が全体の1. 8%, さらに発達障がいやLDの生徒が6. 3%でしたがH24には6. 5%と増加しています。そのため支援学級在籍生だけでなく通常の学級においても指導が難しい生徒たちへの支援も今後は重要になります。さらに中学校では二次障害をおこし授業に参加できず困っている生徒たちが増えています。そのような生徒たちに適切な対応をするにはどうすればよいのか、学びたいと思います。」

特別支援教育研修会	
日時	1月27日(火)15:00~16:30
	「指導が難しい生徒への対応」 庄司先生
対象	鳳中学校の先生方(参加自由)
場所	図書室
普段から授業に集中できていない生徒、退屈そうな生徒、教室から出てしまう生徒、パニックをおこしたり、周囲と円滑な人間関係を構築することが困難な生徒など、様々な生徒がいます。H15. 3. には支援学級在籍生が1. 8%、さらに発達障がいやLDの生徒が6. 3%でしたがH24には6. 5%へ引き上げられています。全体の1割近くの生徒に支援が必要です。支援学級生だけでなく通常の学級に困っている生徒たちの支援も今後は重要になります。さらに中学校では二次障害をおこし授業に参加できず困っている生徒たちが増えています。そのような生徒たちに適切な対応をするにはどうすればよいのか、学びたいと思います。	
①人の話が聞けない、大きな声を出さない、聞かない、他人のいふことは聞く? 1つの対教師能力+30の難易度+300の小さなルール違反・努力だけに集中して対応してもダメ 感傷と楽しさの両方を感じる 怖い・一面だけを見てはいけません。見えないところで良い人間関係をつくっているのかも。 ヒヤリ・ハッと理解を促すこと。 2000(aim)音がやかに2000(aim)音で2000(aim)音が効かない、静かにしているとき聞けるはずだが騒がしさがエスカレートしていく。 不適応行動にいくつかの対応を試してみる。 悪いところではなく、良いところ、できたところをほめてみよう!	
③場がよい発表を繰り返す。 「注目課題」 いつも忘れられていると名前をよばれるだけでうんざりする。	
④遊んだり暴れている生徒に対してどう対応すればよいか、今後パニックをおこさせないためにはどうすればよいか。 パニックは5分は続きません。様子を見て対応を。	
⑤周りの生徒の理解を進めるにあたって、保護者や本人の意思にかかわらず本人の発達障害的要素を話せるのか? また当事者に迷惑行為を受けている生徒の保護者に納得いく説明ができるための留意点は? (特に謝罪できない観の場合) 要求はエスカレートします。 簡単にあやまらない、できないことははっきり言うこと。	
⑥低学力(小学校低・中学年レベル)生徒への効果的な学力補充のしかた。 どこまでできるのかアセスメント、1~2年生でわからなくなっている生徒はツライだろうと思う。 本当はどう感じているのか? を理解する。 わかりだいのにわからない、行きたくないに行けない。	
⑦家庭環境が劣悪な生徒が学校に家庭問題を引きずってくる中で保護者へのアプローチ。 不思議な親を必要以上に相手にしない。	
⑧保護者側からの要求も増えていく中、各教員それぞれの考え方ももあり、「どこまであてられるべきかを考えることが難しくなっている」と思われます。 できる範囲で、正当な要求か? ふりまわされないように。 何かあった時は先に連絡を! 保護者が来校する時、何かあったのか? 突然か? を考える。 最近どうですか? と気軽に家庭訪問ができる人間関係を。	
⑨自立つ生徒だけでなく弱い立場にいる生徒を含め学校全体で関わるためにはどうすればよいでしょうか。各教員の個々の「力」で対応しなければならぬ(出来なければならぬ)という考えが無意識のうちにも広がってきているように思います。 教師は指導のラインを決めよう。学年で、学校で、クラブで、授業での集団作り。 子どもに話す時に自分が言われるとうれいことを考えて話してみる。	
参加者 教頭・菊井・藤田・花田・栗橋・杉山堂・辻西・塚・森脇・須山・竹村 岡野・杉山・岩井・堀田 (敬称略) 以上の先生方が参加してくれました。最初の雑談で先生方の中には支援学級生のごことであまり関係がないのかもしれないが、・という話もあり、通常の学級内の支援を要する生徒のことという認識が薄いように感じました。そのため生徒指導的内容が中心で発達障がいやLDについても十分な研修ができなかったように思います。 これからの二一も考えて今後U、D、授業や合理的配慮についても研修していきたいと思えます。	

研修は学期に1回ずつ行い、できるだけ多くの職員が参加できるようにしました。成果として特別支援教育は支援学級生だけが対象でなく全ての生徒が対象であること、支援のしかたで効果的な方法がわかった、などの感想がありました。

(2) 生徒の居場所を確保する。

クラスの中でもより良い人間関係を構築できるように

- ①授業中の言語活動の充実を図り、授業に取り入れること。
- ②クラブ活動にも積極的に参加させること。
- ③支援学級を昼休み、放課後に開放して誰でも学習や休息の場に利用できる。などの取り組みを行いました。

②のクラブ活動は支援担任が顧問をしている関係で水泳部に在籍する生徒が多くいます。水泳の技能も、全く泳げない生徒から上級者もいますが3年間クラブ活動を続けることで達成感を味わうことができました。先輩、後輩など年齢の違う人間関係も構築し、自分の立場を再確認することもできたように思います。周囲に認められ、自己肯定ができ、そうしたことを通して生徒それぞれの自尊感情も育つ、という効果がみられました。



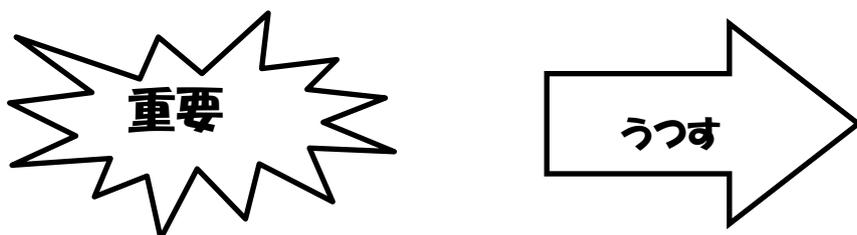
堺市総体の応援の様子

③の教室開放によって支援学級生、通常の学級生徒とが交流し、協力し合う様子が見られるようになりました。支援学級在籍ではないが支援を必要とする生徒たちの居場所となることもありました。ともに遊び、学ぶことで生徒たちがお互いの相違や共通点を見出すことができました。他者を受け入れるきっかけにもなりました。ただ、騒音や人が多いことを苦手とする生徒にとって、「安らぎの場」にはならないのではないか、という疑問もあり、課題も残っています。

(3) 学校の授業にユニバーサルデザインを取り入れて「わかる授業」を目指す。

支援が必要な生徒だけでなく全ての生徒に対して分かりやすい授業を行えるように教職員対象に研修を実施し、視覚的支援の方法や環境整備についても学びました。

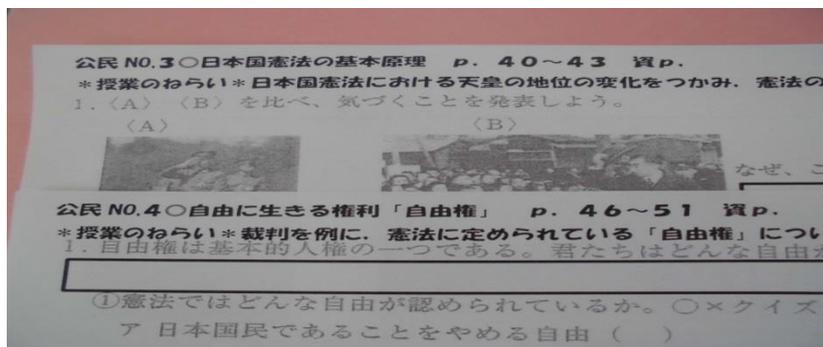
また校内の学力向上委員会では「鳳中学校スタンダード」を作成し、全ての授業で共通の視覚支援グッズを使用する、などが現在試行中です。



視覚支援グッズの一例

4. 結果

以上の取り組みから少しずつですが変化が見られるようになりました。先生方のプリントには必ず通し番号がつけられ、板書を苦手とする生徒にも書きやすいように記号や番号がつけられるようになりました。



授業の見通しやねらいも提示されるようになりました。授業中に解答できなかった生徒のために解答用紙も配布されるようになりました。毎週放課後、火・木曜日には勉強のため、自主的に支援学級にきて学習していく生徒も増えました。

教科の先生方もクラブや授業の準備にと忙しい中、放課後学習会に協力して下さいます。保護者向けの相談日を設けたことで「今までずっと一人で我が子のことで悩んでいたのです。誰かに相談できて良かったです。」と仰ってくださる保護者もいて、ひとりで悩んでいた保護者の方々ともつながることができました。

ただ、いきなり結果がでるわけでもなく、相変わらず「授業が楽しくない」、「友達とうまくいかない」、「テストの点が思わしくない」と子どもたちの悩みはつきません。しかし子どもたちが学校生活の中で相談できる仲間をつくり、周囲に認めてもらえることで少しずつ成長していけるように支援を続けていきたいと思ひます。また、子ども一人ひとりが達成感や充実感を味わい、自己肯定感を育んでいけるように今後も様々な研修や実践を行っていきたく思ひます。

5. おわりに

鳳中学校で特別支援教育コーディネーターをさせてもらってから3年が過ぎました。試行錯誤でいろいろな取り組みをさせていただくのですが、「やってよかった!」というものもあれば「あまり効果がない」ということもあります。他の学校での取り組みを教えていただいたり、研修をさせてもらったりもしますが、やはり学校の実態に合った支援が必要であると実感するとともに先生方の協力なしには実践は不可能であるとも思ひます。

すべての子どもたちが楽しく充実感をもって登校でき、誰かと比較するのではなく、自分自身の成長に応じた発達ができるよう特別支援教育を実践していきたく思ひます。

そして何より子どもたちが自尊感情を大切にできること、将来は自立した大人になり良い人生を歩んでくれることを望みます。